

## 博士学位論文審査報告書

大学名	早稲田大学
研究科名	スポーツ科学研究科
申請者氏名	嘉手苺 徹
学位の種類	博士（スポーツ科学）
論文題目	沖縄空手の創造と展開：呼称の変遷を手がかりにして Creating and developing Okinawa Karate: The significance of transitions in the term” karate”
論文審査員	主査 早稲田大学教授 寒川 恒夫 学術博士（筑波大学） 副査 早稲田大学教授 志々田 文明 博士（人間科学）（早稲田大学） 副査 早稲田大学教授 友添 秀則 博士（人間科学）（早稲田大学）

題目に出る「沖縄空手」は沖縄において近年好んで用いられる言葉であり、そこには「日本空手」との差異化が意図されている。沖縄人が自身をウチナンチュー、本土の日本人をヤマトンチューと呼ぶのに呼応する語法である。

空手は沖縄で生まれたが、その基になったのは中国から伝わった「拳法」であり、これが王国時代（15世紀－1879年）に沖縄化して「唐手」となり、1879年の琉球処分（沖縄が日本の統治に組み込まれた事件）後に日本本土に伝播し、本土で「空手」「空手道」として受容され全国組織化を果たし（1964年の全日本空手道連盟の結成）、さらに諸外国に普及して1970年に世界空手道連盟 World Union of Karatedo Organizations を設立した歴史をもっている。

空手はこのように、「拳法」、「唐手」、「空手」、「空手道」と呼称変容して今日に至っているが、この変化は技術や精神文化にとどまらず、担い手のアイデンティティーにも及んでいる。

沖縄人は、琉球処分後に急速に進行した日本化を沖縄アイデンティティーの崩壊危機と捉え、伊波普猷らによって民族文化復興運動が展開されたが、そうした沖縄アイデンティティーを体現する文化として「唐手」が注目され、起源の見直しが行われたのである。すなわち、「唐手」ははるかに遠い昔の沖縄人が実践していた素手武術である「手（ティー）」が始まりで、後に中国の「拳法」が影響して「唐手」が生まれたとする説が提唱され、流布されたのである。この新しい起源説によって空手のルーツは他ならぬ沖縄と定められ、これが沖縄アイデンティティーを強化する一翼を担った。「唐手」が本土に渡って沖縄ルーツをにわかに連想させない「空手」や「空手道」と呼称変化しても、始まりは沖縄の地であることが担保されることになったのである。

こうしたアイデンティティー問題の背景には沖縄の特別な被支配の歴史がある。すなわち17世紀に薩摩藩の侵攻を受けて以来、現実には薩摩藩の統治を受け幕府に対しても恭順の意を表しながら、他方で中国の皇帝に入貢して冊封を受けるという日中両属状態で永らく王国が維持され、しかし琉球処分後は全面的に日本国民たることを求められたのである。

沖縄が経験したこうした対日対中関係は彼らのアイデンティティーを特別なものとしたが、そうしたアイデンティティー問題を沖縄空手の中に見い出し、歴史的に再構成しようとするのが、本論文の目的である。

論文作成者がそのために注目したのが空手の呼称であった。中国音と訓読みの混成である王国時代の「唐手（トウディー）」は、琉球処分後に訓読みの「唐手（からて）」に変わり、さらに発生地を特定しない「空手」「空手道」へと変化するなかであって、近年沖縄で「沖縄空手」がとみに叫ばれるようになったのである。論文作成者はこの「沖縄空手」の表現の中に、新しく強い沖縄アイデンティティーを認める。

以上述べた研究発想と、その証明作業はこれまで試みられたことがない。この点において、本論文は高いオリジナリティーを有すると評価される。

以下に章を追って論文全体を概観する。

序章では、論文の目的とその背景、研究方法が述べられ、先行研究が検討されて、本論文のオリジナリティーが示される。

第1章「琉球の徒手武芸：多様化した琉球の武芸」では、薩摩藩の支配を受けて以後の王国の武術（わけても徒手武術）が史料に基づいて検討される。薩摩の武器携行禁止の布達を受けて、王国は1667年に「羽地仕置」を発し、王国の政治と武に関わる階層すなわち「武士」が身につけるべき教養の内容（任官の条件でもあった）を定めたが、そこには、学文、算法、書法、医術などから茶道、華道、謡、それに唐楽が挙げられ、武術に関わるのは乗馬に留まっていた。全体的に日本文化化と脱武装化（文人化と言ってよいであろう）が求められるトーンになっている。

「羽地仕置」の100余年後の1778年に著された「阿嘉直識遺言書」は薩摩藩と王国が期待する武士像を検証するのに有用な史料である。これは那覇の士族である阿嘉直識が子息直秀に遺した武士の心構えを教示した内容であるが、そこでは、武士の必須の教養である日本と中国の学問・諸芸を懈怠なく修めるよう諭したのに続けて、興味深いことに武術に触れ、武士の家の伝統として薩摩藩の剣術である示現流は怪我せぬ程度に嗜んでおくことは結構だが、「からむとうやはらなどは稽古に不及候」と記すのである。理由は、不時のいさかいにこれを用い、かえって身を滅ぼす元になるためという。

これまで空手史研究では、この部分はほとんど問題にされなかった。論文作成者は「からむとうやはら」を唐無刀柔と解し、いずれも徒手武術である中国の拳法と日本の柔術に言及したものであり、鋭くも、これに拠って当時の沖縄に拳法が知られ実践されていたろうこと、また「からむとう」は「唐手」につながる沖縄人による最初の呼称であったろうとみる。

このように「からむとう」は殺傷を目的とする武術であるが、これはまた、パフォーマンスとしても上演された。後の19世紀の史料に「唐手」と出るもので、首里城正殿の改築祝賀の宴や中国の冊封使を歓迎する表演種目としてであった。論文作成者は、ここに多様化を認める。

第2章「惑う空手の評価：琉球処分以降における転換期の唐手」では、琉球処分から唐手が沖縄の諸学校に導入される20世紀初頭までの20余年間が扱われる。この時期は、琉球処分が求める中国への進貢・冊封の禁止を受けて、これに反発する旧士族を中心とする親中国派が琉球復興運動を起こし、親中と親日が県内に反目するなか、日清戦争の日本勝利によって親中派の活動が止み、これを機会に、「唐手」が中国音の混じる「トウディー」から訓読みの「からて」に変じる時期であることが論じられる。

第3章「新たな唐手の創造：体育化と武道化」では、唐手が学校教育への導入をきっかけ

に、その教授法が整えられ、沖縄の新しい文化として再生する過程が再構成される。この体育化再生とは別に、注目されるべきは船越義珍による「唐手」の沖縄起源説の提唱である。船越の「手（ティー）」起源説は、親中派がよくした「唐手」に対し世間から投げかけられていたマイナスイメージを一気に払拭し、「唐手」を晴れて沖縄伝統文化とするのに大いに役立ったのである。さらに、船越の上京に伴う日本武徳会との交流が注目され、これが「唐手」に日本武道論を導入する契機となったとする視点は鋭い。

第4章「沖縄空手の空手道への志向」では、第3章で取り上げた船越の本土における唐手の普及行動と、彼の日本武道論を援用しての唐手の武道化(近代武道化)工作が論じられる。「唐手」が「空手」と改称されるのは「唐手」の武道化が前提であるが、このことによって、「唐手」は沖縄文化から日本文化に変容する。

本土で起きた「唐手」から「空手」への呼称変更(同時に精神文化変容)は、沖縄へも持ち込まれ、呼称変更にかに対処するかについての会合が1936年に持たれている。琉球新報社の主催で、大きい社会的影響力を持つ県内の官吏、軍人、教育者、空手家が集い、「空手」への変更を承認して任を終えている。背景には、時世を反映した日本主義が働いたと論文作成者は分析する。

第5章「再出した「唐手」の呼称」では、上記1936年の呼称問題会議以降、沖縄でも定着した「空手」の呼称が再び「唐手」に戻される問題が論じられる。ことは東京において発生したもののだが、戦況が悪化し、沖縄戦が開始した1945年の東京の諸新聞社が報道記事に沖縄の空手に対し「琉球」の「唐手」の表示を用いたのである。「唐手」表示は大本営陸軍部の指示であったが、兵器が尽きた最後の沖縄人の白兵肉弾戦として「唐手」が勧められたのである。旧称の「琉球」の「唐手」は、日本の文化・空手道ではない、異郷の神秘的な殺傷術をイメージさせるものであったのか。

第6章「終章」では、それまでの論述が問題設定に沿って簡潔にまとめられる。

論文作成者による本論文と関わる学術論文は以下のものである。

嘉手苺徹、2016、近代における空手道(唐手)の型の創造に関する一考察：船越義珍の著作における「型の構成」を手がかりにして、武道学研究、49-2：121-136.

本論文は、問題設定の独自性と論述の実証性、結論の妥当性をもって、博士(スポーツ科学)の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上